生き延びるため、伝える

淡路・被災地語り部シンポ

自然災害の経験を伝える語り部活動。26日に淡路市で始まった「全国被災地語り部シンポジウムin西日本」では、まだ災害が起きていない「未災地」と未来へ、被災者の心情や教訓をどう伝えるのかが提言された。長崎県雲仙・普賢岳の噴火（1991年）から阪神・淡路大震災（95年）、東日本大震災（2011年）、熊本地震（16年）まで―。各地で活動の模索が続いている。

（1面参照）

東日本大震災の語り部活動について話す宮城県南三陸町の伊藤俊さん＝26日午後、淡路夢舞台国際会議場（いずれも撮影・内田世紀）

進む風化 危機感あらわ
「後進育成の仕組みを」

植松治二さん

長井大輔さん

米山正幸さん

「（記憶の）風化どころではない。語り続けなければ、なかったことにされてしまう」

東日本大震災から6年近くが過ぎ、宮城県南三陸町の伊里前復興住宅自治会長の伊藤俊さん（41）は被災状況が見て取れなくなっていく町に危機感を表し「皆が語り部として話してほしい」と訴えた。

昨年4月に熊本地震が起きた熊本県でも、1889（明治22）年に大きな地震が起きていたが、130年近くを経て、多くの住民には地震に備える意識は薄れていた。

淡路市出身の熊本市副市長、植松治二さん（52）は「将来にどうつなぐのかは、われわれ自身の問題」と指摘。避難環境の悪さなどが原因で亡くなる震災関連死が相次いでいることから「地震直後だけでなく、その後を生き延びるために、その教訓を残したい」と話した。

また、43人の犠牲者を出した噴火から四半世紀が過ぎた雲仙・普賢岳の語り部活動を支援する長井大輔さん（42）は「噴火を知らない世代が増えたが、火山のリスクがあるのは長崎だけではない」と注意を促した。火砕流で焼けた学校の前で、より当時の生々しい状況を感じられるよう、伝え方を工夫していると紹介した。

一方、阪神・淡路大震災を引き起こした野島断層を保存する北淡震災記念公園（淡路市）で語り部を務める米山正幸さん（50）は、消防団員としての体験だけでなく、学校教諭や医者などさまざまな立場の人から聞き取った教訓を、来園者に語る。

広島では原爆の被爆経験者の「伝承者」育成が進んでいる。米山さんは「体験をしていなくても語り部になることができる」と、語り継ぐ手法を生み出す重要性を強調した。

（高田康夫）

備える 生かす

兵庫では、多くの被災者が語り部として活動している。阪神・淡路大震災から22年が過ぎ、語り部の高齢化が進む中、どう若い世代に引き継ぐかが課題になっている。

人と防災未来センター（神戸市中央区）の語り部は43人。元消防士や教職員などさまざまな立場から経験を伝える。2014年度、語り部の話を聞いた修学旅行生などの団体客は計6万3千人に上る。同様に、淡路市の北淡震災記念公園で約20人が、神戸市長田区の住民交流施設「ふたば学舎」でも約20人が活躍。施設を拠点にせず、出向いて震災を語るグループもある。

高齢化 平均73歳の施設も

語り部の高齢化は共通し、同センターの場合は平均年齢が73・6歳。10年以上の活動歴がある人が多く、体調の問題でやめていく人がいる。一方、震災からの時間の経過で心の整理ができたり、他の被災地を見て語る必要性を感じたり、活動に加わる若い世代も出てきている。

（高田康夫）

2017/2/27【神戸新聞】

生き延びるため、伝える